

和歌山県において津波防災ワークショップを開催

平成25年10月10日（水曜日）午後1時半から、和歌山市の県民交流プラザ・和歌山ビッグ愛 大ホールにおいて、京都大学防災研究所主催による、『和歌山県沿岸域津波防災ワークショップ』を開催いたしました。

このワークショップは、平成23年2月及び今年の2月に国土交通省近畿地方整備局と防災研究所が協力して実施した、津波等に対する沿岸域住民、自治会、事業所の意識アンケート調査の成果を地域に情報還元するとともに、この機会をとらえて、南海トラフの巨大地震・津波予測の見方・とらえ方や津波等から身を守るための迅速な避難等の方策について、地域と一緒に考えていくという主旨で開催したものです。



ワークショップでは、まず、上記の意識アンケート調査成果に基づく「和歌山県沿岸域住民の防災意識の変化について」の報告が社会防災研究部門の小野特定教授からありました。



次に、「津波時の住民避難行動シミュレーション」と題して社会防災研究部門の畑山満則准教授が、また、「南海トラフ巨大地震津波の被害予想と減災の考え方」との演題で巨大災害研究センターの鈴木進吾助教が、それぞれ講演しました。さらに、休憩を挟んで、講演者を囲むQ&Aを行いました。

ワークショップには、台風24号の影響による不安定な天候にもかかわらず、地元和歌山県内はもとより県外からも合わせて140名を超える参加者がありました。

参加された方々は、防災研究所からの報告・講演に熱心に聞き入ったほか、Q&Aでは、津波避難に備えた住民情報の収集と個人情報保護との関係や実効性の高い避難訓練のあり方といった課題、現場の悩みについて質問し、講演者との間で熱心な議論がなされました。



議論の中で、鈴木助教からレベル2の巨大な津波予想をあえて世に問う意図と意義について詳細な解説があった他、畑山准教授からは、地元住民からの避難行動情報を盛り込むことによって、より効率的・効果的な住民避難を実現するためのシミュレーションが可能となるとの説明があり、地元市町村やコミュニティと防災研究所の今後のコラボレーションに向けた呼びかけがなされました。これらの結果、多くの地元関係者との間で京都大学防災研究所と地域の今後の協働が約されました。

本ワークショップは、翌日の朝日新聞朝刊の地元欄でも取り上げられるなど大きな反響を呼びました。これを機会に、和歌山県沿岸域の津波防災における京都大学防災研究所の更なる寄与と貢献が果たされれば大変幸いです。

（社会防災研究部門 小野憲司）